

# 商人の力

中尾 武彦

今年1月にダボスの世界経済フォーラムに行った際に、あるランチでスイスの大手商社DKSHのヴォレ会長と同席した。DKSH社の前身であるシイベル・ブレンワールド社は幕末に横浜で開業したということだ。アジア開発銀行の今年の総会は5月に横浜で開催予定だと紹介すると、親切にも、マニラの私のオフィスに、会社の創業者についての「ブレンワールドの幕末・明治ニッポン日記」(横浜開港資料館編)を送ってくれた。

ブレンワールドは、1863年に24歳で、スイスと日本の通商条約を交渉する使節団の一員として来日している。スイスは当時から高級織物や時計などの精密機械に競争力があり、これら売り込もうとした。スイスと日本の通商条約は1864

作られた。

ブレンワールドは、富士山にも登ったが、八王子方面まで馬に乗って出かけている。当時の日本の養蚕や製糸・紡績のレベルはかなり低いと見たようだ。会社の設立後には、幕府の外国奉行が横浜までスイス製の小銃見本を見るために訪れた。横浜に日本最初のガス灯がともったのは1872年だ。横浜の材木商、高島嘉右衛門ほかの日本人商人グループがブレンワールドやフランス人技師の協力を得て事業権を落札した。

最近、開発金融の世界では、民間資金の活用ということがよく言われる。政府が事業権の入札で民間の業者にインフラ整備の資金調達、建設、運営を委ね、業者は収益で資金を回収する官民連携の手法はその中心的な手段だ。アジア開発銀行でも各国の制度整備や具体的な案件組成を助けているが、途上国でのプロジェクトファイナンスには、土地の買収、収益やコストの見直し、規制変更、回収資金の海外への送金などに関するさまざまなリスクがあり、理屈で言うほど簡単ではない。

しかし、考えてみると、横浜のガス灯の例のように、インフラへの民間資金の活用ということは、今に始まった話ではない。米国や英国では、19世紀、鉄道は民間の会社によって建設された。日本でも、大都市の私鉄網のみならず、中央線も東北

年に結ばれ、ブレンワールドは1866年から横浜でビジネスを始めた。当時の日本はスイスの時計を購入するほど時間に厳密ではなく、時計は売れなかつたが、日本から生糸を仕入れて欧州に売ることが昭和初年にいたるまで、よいビジネスになった。

ブレンワールドは、シンガポール、香港を経由して横浜に来ている。それぞれの寄港地にはすでに欧州の商社が多く進出しており、同胞のスイス人やドイツ人ほかのビジネスマンから歓迎を受けた。横浜でも1860年代には外国人居留地として、住宅・文教地区の「山手」と商業地区の「山下」が整備されていた。外国人たちが資金を出し合つて、劇場(ゲーテ座)、ライフル射撃場なども

線も当初は国からの事業権に基づく民営だ。明治時代は経済面では、今より資本主義が徹底していたとも言える。

さらにさかのほれば、江戸初期の京都の大商人だった角倉了以は幕府に願ひ出て保津川の開掘を行い、農業の盛んな丹波地方から京都につながる水運を整備した。水運からの収益の一部は修理保全、一部は幕府への献上に当てられたが、残りは角倉家が代々受け取り、他の河川の開発にも再投資された。この例など、まさに今の官民連携がねらっていることではないか。

少し歴史を振り返るだけで、貿易はもちろん、インフラ整備、それに国と国の関係までも、ビジネスチャンスを世界中に求める商人たちの役割がどれだけ重要だったかがよくわかる。

ちなみに、フィリピンでも、戦前からマニラの輸出や化粧品やスポーツ用品まで含めた日本雑貨の販売に日本の商人が活躍して、信用を築いていた。戦争で大きな被害を受け、対日感情は一挙に悪化したのが、それを好転させたのも、外交や援助の努力に加えて、バナナの貿易や製造業への直接投資などを通じて誠実に取引先との関係を培ってきたビジネスマンたちだった。

アジア開発銀行総裁